

【研究ノート 14】

Dīghanikāya と対応しない『長阿含経』の説示年代の推定

森 章司

はじめに……………175

【1】『長阿含』011「増一経」……………177

【2】『長阿含』012「三聚経」……………178

【3】『長阿含』030「世紀経」……………179

はじめに

【1】本稿は研究ノートの【13】「*Dīghanikāya* と対応漢訳経の説示年代の推定」の続篇である。

上記は *Dīghanikāya* の「戒蘊篇 (*Silakkhandha-vagga*)」「大篇 (*Mahā-vagga*)」「パーティカ篇 (*Pāṭika-vagga*)」に収録されている34経を中心として、それらに対応する漢訳諸経をはじめパーリの MN. や SN. や AN. などの説時年代を考察したものである。もちろんその対応経の多くは漢訳の『長阿含経』中に見いだされ、それについてはパーリの DN. と一緒に説時を考察してあるので改めてこれを考察する必要はないのであるが、『長阿含経』に収められる経のなかでただ3経だけはパーリの *Dīghanikāya* に収められている経とは対応しない。したがって本論稿ではこの説時を考察しようとするのである。といっても本文をご覧頂ければわかるようにこれら3経には説時を推定する情報は含まれず、有り体に言えば後世に作られたアビダンマ的な経で、だからパーリに対応経がないといってもよいであろう。

参考のために『長阿含経』をもとにしたパーリ *Dīghanikāya* との対応表を作っておく。

経番	『長阿含』経名	経番	DN.経名
01	大本経	14	Mahāpadāna-s.
02	遊行経	16	Mahāparinibbāna-s.
03	典尊経	19	Mahāgovinda-s.
04	闍尼沙経	18	Janavasabha-s.
05	小縁経	27	Aggañña-s.
06	転輪聖王修行経	26	Cakkavatti-sihanāda-s.
07	弊宿経	23	Pāyāsi-s.
08	散陀那経	25	Udumbarika-sihanāda-s.
09	衆集経	33	Saṅgīti-s.
10	十上経	34	Dasuttara-s.
11	増一経		

12	三聚経		
13	大縁方便経	15	Mahānidāna-s.
14	釈提桓因経	21	Sakka-pañha-s.
15	阿と夷経	24	Pāṭika-s.
16	善生経	31	Siṅgālovāda-s.
17	清浄経	29	Pāsādika-s.
18	自歓喜経	28	Sampasādanīya-s.
19	大会経	20	Mahāsamaya-s.
20	阿摩昼経	03	Ambatṭha-s.
21	梵動経	01	Brahmajāla-s.
22	種徳経	04	Soṇadaṇḍa-s.
23	究羅檀頭経	05	Kūṭadanta-s.
24	堅固経	11	Kevaṭṭa-s.
25	倮形梵志経	08	Kassapa-sīhanāda-s.
26	三明経	13	Tevijja-s.
27	沙門果経	02	Sāmaññaphala-s.
28	布た婆楼経	09	Poṭṭhapāda-s.
29	露遮経	12	Lohicca-s.
30	世記経		
		06	Mahāli-s.
		07	Jāliya-s.
		10	Subha-s.
		17	Mahā-sudassana-s.
		22	Mahā-satipaṭṭhāna-s.
		30	Lakkhaṇa-s.
		32	Āṭṅāṇāṭiya-s.

なお【研究ノート13】の場合は【 】で示した節番号と DN.の経番が一致しているが、本稿では一致していない。

【1】『長阿含』011「増一経」（大正01 p.057中、国訳07 p.211）

[1] この経の概要は次のとおりである。

あるとき世尊は**舎衛国の祇樹給孤独園**に大比丘衆 1,250 人と共に住された。そのとき世尊は比丘らに、「一法から十法までの 10 種の法に各々成法（成されるべき法）と修法（修せられるべき法）と覚法（遍知されるべき法）と滅法（断ぜられるべき法）と証法（証せられるべき法）がある」としてこれらを詳説された。比丘らは仏の所説を歡喜奉行した。

[2] この経の説時を推定する情報は仏在処が祇樹給孤独園とされるのみであって、その他には含まれていない。

したがってその説時は、祇樹給孤独園がブツダの教団に寄進された**釈尊 48 歳＝成道 14 年の雨安居前から釈尊が舎衛城で雨安居を過ごされた釈尊 77 歳＝成道 43 年までの間の舎衛城で雨安居を過ごされた年のいずれかと推定する外はない。**

【2】『長阿含』012「三聚経」（大正01 p.059中、国訳07 p.217）

[1] この経の概要は次のとおりである。

あるとき世尊は舎衛国の祇樹給孤独園に大比丘衆1,250人と共に住された。そのとき世尊は比丘らに、「一法から十法までの10種の法に各々三聚法（悪趣に墮す法、善趣に趣く法、涅槃に趣く法）がある」とこれらを詳説された。比丘らは仏の所説を歡喜奉行した。

[2] この経にも仏在処を祇樹給孤独園と以外には説時を推定するなんらの情報も含まれていない。したがって前経と同様に、その説時は釈尊48歳＝成道14年の雨安居前から釈尊77歳＝成道43年までの舎衛城で雨安居を過ごされた年までの舎衛城に雨安居を過ごされた年のいずれかとするしかない。

- [3] 『長阿含』030「世紀経」（大正01 p.114中、国訳07 p.391）
法立共法炬訳『大樓炭経』（大正01 p.277上）
闍那崛多等訳『起世経』（大正01 p.310上）
達摩笈多訳『起世因本経』（大正01 p.365上）

[1] この経は長文であるが、その概要をかいつまんで記すと次のとおりである。

『長阿含』030「世紀経」：あるとき世尊は舎衛国の祇樹給孤独園にある俱利窟 (Kareri-kutikā) 中に大比丘衆1,250人と共に住された。そのとき比丘らは食後に講堂に集まり、「天地がどのように消滅しどのように生成するのであろうか」と論議していた。世尊はこれを天耳を以て聞いて講堂に赴かれ、比丘らに「出家者たる者は賢聖黙然、議論法語たるべきである」と教誡してから、器世間と衆生世間の構成組織についての仏教の宇宙観を、閻浮提州品第一、鬱單曰品第二、轉輪聖王品第三、地獄品第四、龍鳥品第五、阿須倫品第六、四天王品第七、忉利天品第八、三災品第九、戰鬥品第十、三中劫品第十一、世本縁品第十二の12品にわたって順次に説かれた。比丘らは仏の所説を歡喜奉行した。

法立共法炬訳『大樓炭経』：あるとき世尊は舎衛国の祇樹給孤独園に大比丘衆1,250人とともに住された。その時比丘らは食後に講堂に集まり、天地はどのように破壊し、どのように成就するのであろうかと議論していた。世尊ははるかにこれを聞かれて講堂に赴かれ、閻浮利品第一、鬱單曰品第二、轉輪王品第三、泥犁品第四、阿須倫品第五、龍鳥品第六、高善士品第七、四天王品第八、忉利天品第九、戰鬥品第十、三小劫品第十一、災變品第十二、天地成品第十三の13品にわたって順次に説かれた。

闍那崛多等訳『起世経』：あるとき世尊は舎婆提城の迦利羅石室に住された。その時比丘らは食後に常設法堂に集まり、この衆生所居の国土天地はどのように成立し、どのように散壊するのかということについて議論していた。世尊はこれを天耳で聞かれ、石室から法堂に赴かれて、閻浮洲品第一、鬱單越洲品第二、轉輪聖王品第三、地獄品第四、諸龍金翅鳥品第五、阿修羅品第六、四天王品第七、三十三天品第八、鬪戰品第九、劫住品第十、世住品第十一、最勝品第十二の12品にわたって順次に説かれた。仏がこの経を説き終ったとき比丘らは歡喜奉行した。

達摩笈多訳『起世因本経』：あるとき世尊は舎囉婆悉帝城の迦利囉窟に住された。その時比丘らは食後に迦利囉堂に集まり、この世間や天地衆生、所居の国土はどのように転合しどのように転散するのであろうかと議論していた。その時世尊は天耳でこれを聞かれて堂に行き、閻浮洲品第一、鬱多羅究留洲品第二、轉輪王品第三、地獄品第四、諸龍金翅鳥品第五、阿修羅品第六、三十三天品第八、鬪戰品第九、劫住品第十、住世品第十一、最勝品第十二の12品にわたって順次に説かれた。仏がこの経を説き終ったとき比丘らは歡喜奉行した。

[2] 上記のようにこの経はたいへん長い経であるが、内容としてはこの世界の成壊を説くだけであるから、説時を推定する材料は仏在処しかない。

その仏在処と説処を『長阿含』030は舍衛国祇樹給孤独園の俱利窟と講堂、『大樓炭経』は舍衛国祇樹給孤独園と講堂、『起世経』は舍婆提城の迦利羅石室と常設法堂、『起世因本経』は舍囉婆悉帝城の迦利囉窟と迦利囉堂とする。「舍婆提城」も「舍囉婆悉帝城」も‘Sāvatti’ ‘Śrāvasti’の音写語であり、「俱利窟」「迦利羅石室」「迦利囉窟」は‘Kareri-kuṭikā’の音写語であるから4者とも同一であり、説教の場は祇樹給孤独園の講堂である。

なおこの経に対応するパーリ経典はなく、内容からいってもその成立の時期は遅いと見なければならぬであろう。しかし本研究の基本的な聖典観は1つ1つのテキスト批判は行わず、とりあえず原始聖典中に収められている経のすべては第1結集において編集されたと見ることになっているので今ここでは議論しない。

また本稿に収めた前2経は共にアビダンマ的な内容であり、テキスト成立についてはこれらも議論しなければならないところであるが、同じ理由で議論しない。

このような事情があるからとりあえずこの経の説時は釈尊が最後に舍衛城で雨安居を過ごされた釈尊77歳＝成道43年の雨安居中としておく。